

食科協20周年に寄せて



2022年8月1日

NPO 法人 食品保健科学情報交流協議会
常任理事 大道公秀

20周年を皆さまとお祝いしたく存じます。私は2021年度よりメンバーに加えていただいた新米メンバーです。

私が食科協の名前を初めて知ったのは、おそらく平成16年ごろではないかと思います。私はその頃、日本食品衛生協会に就職し、本部事業部に配属されました。その時の上司は東島弘明さん（のちの食科協専務理事）です。そして、日本食品衛生協会を、伊藤蓮太郎先生が何度かおたずねになっていました。そのとき少なくとも一度は、席をご一緒した記憶があります。その際に、食科協の名前を聞いたかに思います。たしか、伊藤先生は食科協の事業を説明されていたような記憶があります。そして何やら、熱意をもってその活動を広げたいとされているご様子とお姿が、記憶に残っています。その当時専務理事であったことを後から知ります。またその当時、私の担当していたある種の事業の委員に林裕造先生が就かれています。林先生はその当時に、食科協理事長だったことも後から知りますが、なにやら食科協とのご縁を感じます。

平成17年度から、私は業務で、厚生労働科学研究「食品安全施策等に関する国際協調のあり方に関する研究」班のお手伝いをすることになるのですが、その研究班の分担研究者に関澤純先生が就かれました。関澤先生は私が博士課程を過ごした研究室に、（私の大学院入学前になるのですが）植物エストロゲンの生体影響についてご講演いただいたこともあり、毒性学の研究者としてのお名前を知っておりました。研究班で関わらせていただくなかで、関澤先生その頃の活動を知ることになりました。サイエンスを基盤に、食のリスクコミュニケーションの啓蒙活動を、オーガナイズされ、推進されていく関澤先生のお姿に、感銘を受け、私もひそかにその領域に関心を寄せ、関澤先生執筆のその当時の論文は、業務の傍らですべて読んでいました。その関澤先生がのちに食科協理事長に就かれますが、その頃にすでに食科協の活動にも貢献されていたかとは思いますが、食科協の記念誌には登場はしてこないのですが、関澤先生がコーディネーションされていたセミナーを日本食品衛生協会本部のある食品衛生センター講堂にて休日に開催されたことがあったと思います。たしかそのとき、事務局として休日出勤した記憶があります。休日なのに、みんな熱心だな～とそのときは思っていました。

日本食品衛生協会は、平成20年の初秋に退職し、民間企業にて食品安全関連ビジネスに職に就きます。しかし、日本食品衛生協会の職員の時と同じようには人は接してくれなくなります。当たりまえのことです。いろいろもがいていた時期でもありますが（いまももがいています）。日本食品衛生協会退職後に「このさきのこと」で、実は伊藤蓮太郎先生に相談にのってもらったことがあります。日本食品衛生協会在職時にお会いしたときのご様子やお姿から、いちど私は伊藤先生とお話したいとおもっていたのです。そのとき伊藤先生にお会いするため、食科協本部の事務所を訪ねたことを覚えています。その折には、伊藤先生ありがとうございました。このように、食科協と私は、何かしら関わりをもってきました。

民間企業でのビジネスの経験を経て、その後、大学教員に転じました。今年で大学教員としては11年目になります。令和3年4月よりは実践女子大学の食品衛生学の教員として着任しています。また昨年度より、この会のメンバーに加えていただきました。現在の食科協の役員の皆さまは日本食品衛生協会在職時にお世話になった方もたくさんお見えになります。これもまた何かのご縁かと思えます。

かつてあるところで、「〇〇〇と△△△のどっちがえらいとおもっているんだ！」という言葉はどこかで聞きました。そのとき食科協メンバーでもある、とある方が「どっちがえらいとかというのではなく、役割分担なんですよ」と言われていたことを今でもよく覚えています。食のリスクコミュニケーションをすすめようとしたとき、どっちがえらいとかという話の先に、コミュニケーションは成立しないと思います。私はそのマインドを大切にしたいと思えますし、そのマインドは食科協にあると思うのです。

食科協は、食品安全、食品保健への熱い思いを持った方々と、その志によって支えられ、発展してきたと思います。20周年は、20年の「執念」でもあるかもしれません。その潮流を、さらに大きくすることは、社会の発展にとって必要であるはずですが、経験が浅い私が、どの程度の力になるかはわかりません。しかし、あえて大きく語れば、この国と、この世界がより豊かで安全・安心な社会を目指したいと思っています。

以上